

## 蓮明阿闍梨日春聖人伝についての一考察

——俗姓鮎澤氏説を手がかりとして——

武市秀学

はじめに

ここにとりあげる日春聖人（二二三〇—二三二一）は、日蓮聖人（二二三二—二二八二、以降宗祖という）から蓮明阿闍梨日春の名を賜った宗祖直弟の僧である。師は、宗祖の命をうけて中老日法聖人（二二五八—二三四一）とともに駿河岡宮に光長寺を開き（二二七六）、布教を重ねて仏殿造立の発願をし、その落成直後に遷化された、同寺の開基同時二祖の一人である（開山は宗祖）。光長寺は現在、法華宗（本門流）の大本山となっているが、寺史によればその前身は天台宗に属し、当時の住持空存がのちに改宗した日春聖人とされる。ところで日春聖人の伝記については、これまでその俗姓や出自に関してあまり考察されたことがなく、また師が宗祖の門弟となる以前の来歴にも異説があることが知られているが、管見の限りそれが論文として整理されたことはなかったようである。そこで本稿では、日春聖人の伝記のうち、まず宗祖の門弟となる以前の来歴について二つの説を紹介し、次に

日春聖人の俗姓について新たな資料を検討して、師の出自について考えてみたい。

### 一、日蓮門下帰属以前の経歴

先述のとおり、日春聖人が宗祖の門弟となる経緯については二説あり、すでに太田晴道師によりまとめられている。<sup>(1)</sup>ここでは、次節で日春聖人の出自を考察する前段として、資料をあげてそれらについて確認しておきたい。日春聖人の経歴に関して、寺史によると宗祖に入門以前は光長寺の前身である天台宗寺院の住持であったと伝えるが、まずこの伝承に対して最も具体的な記述のある「本化別頭仏祖統紀」を見てみよう。<sup>(2)</sup>

師諱ハ日春字空存俗姓者鮎澤氏甲州山梨郡之人也天性聰敏好<sub>レ</sub>学<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>倦見<sub>テ</sub>義<sub>ヲ</sub>勇<sub>シ</sub>為<sub>ニ</sub>志信<sub>シテ</sub>仏乗<sub>ヲ</sub>為<sub>ニ</sub>天台宗ノ僧ト<sub>一</sub>頭密兼美<sub>ニ</sub>繼<sub>ニ</sub>慈覚ノ緒<sub>ヲ</sub>化道不<sub>レ</sub>苟<sub>モ</sub>瑞<sub>ニ</sub>世<sub>ヲ</sub>岡ノ宮<sub>ニ</sub>位昇<sub>ニ</sub>法印<sub>ニ</sub>矣師與<sub>ニ</sub>休息ノ乗<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>系脉ノ縁<sub>ニ</sub>偶聞<sub>ニ</sub>テ<sub>一</sub>乗之婦<sub>ニ</sub>吾祖<sub>ニ</sub>怪而不<sub>レ</sub>置来<sub>テ</sub>控<sub>ニ</sub>日乗<sub>ニ</sub>乗具<sub>ニ</sub>告<sub>ニ</sub>所由<sub>ヲ</sub>師亦有<sub>ニ</sub>宿善<sub>ニ</sub>已<sub>テ</sub>隨喜<sub>シ</sub>識<sub>ニ</sub>理同事勝之非<sub>ヲ</sub>畏<sub>ニ</sub>慈覚謗法之罪<sub>ヲ</sub>終<sub>ニ</sub>詣<sub>ニ</sub>身延<sub>ニ</sub>拜<sub>ニ</sub>謁<sub>ニ</sub>高祖<sub>ニ</sub>結<sub>ニ</sub>師資ノ契<sub>ヲ</sub>高祖慈愍維厚賜<sub>ニ</sub>名日春<sub>ヲ</sub>師婦<sub>ヲ</sub>而告<sub>ニ</sub>衆<sub>ニ</sub>衆亦無<sub>レ</sub>戻<sub>コト</sub>終<sub>ニ</sub>美<sub>シテ</sub>日乗<sub>ヲ</sub>有<sub>コト</sub>レ義傲<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>請<sub>ニ</sub>和泉阿闍梨日法上<sub>ヲ</sub>欽奉<sub>ス</sub>実<sub>ナルコト</sub>如<sub>レ</sub>侍<sub>スルカ</sub>高祖<sub>ニ</sub>然<sub>カス</sub>也<sup>(3)</sup>

この記述によれば、日春聖人はもと字を空存と称し、俗姓を鮎澤氏といった。その出身は甲州山梨郡である。仏道を志して天台宗の僧となり、駿州岡宮の天台宗寺院（光長寺の前身）を後継した。彼は休息（甲州山梨郡にある真言宗胎藏寺―後述―）の主である日乗師の血縁に連なるが、日乗師が宗祖の門下に帰伏したことを知り、その経緯を尋ねた結果、慈覚大師の門に連なることの誤りをさと、宗祖を訪ねてその門弟となって日春の名を賜った。その後日法聖人を岡宮に招請したという。

ところで、このような日春聖人の来歴に対して、次のような伝承もある。それは、師が六十六部廻国聖、すなわち法華経を一部ずつ全国六十六か国の霊場に納める廻国聖であつたとする説である。次にそれを示す資料として、『富士門家中見聞』「日法伝」の記述を見てみよう。<sup>(1)</sup>

相伝して云く日法檀越の請に因つて卒塔婆を書して沼津釜の段に立つ六十六部の聖之を見て近隣の人に聞いて誰人の手跡ぞや、答へて云く日法の御筆蹟なり、又問ふ其師は何処に住するや、答へて云く其僧未だ帰らず檀越の家に有り汝往いて論義すべしと、彼、聖聞き畢りて尋ねて檀越の家に往き日法に値ふ、始めて法華を聞き即受法す、日法聖之を具して延山に帰り蓮祖に値ひ奉る蓮祖為に説法す、則ち名を改めて蓮妙坊日春と号するなり。<sup>(2)</sup>

右の文によれば、ある時沼津において日法聖人が信徒の請いに応じて卒塔婆をしたため供養していたところに、一人の六十六部の聖が通りかかり、その筆跡に目がとまり、近隣の村人の手引きによつて日法聖人と出会つた。日春聖人はそこではじめて法華の教えを聞いた。聖に授法した日法聖人は聖を伴つて身延山の宗祖の許に帰り、宗祖は聖のために法を説かれ、蓮妙坊日春の名を授けて門弟に加えられたという。

以上の二説は、日春聖人の宗祖帰属以前について異なつた経歴を記している。また日春聖人が宗祖に帰属することになつた経緯についても、『本化別頭仏祖統紀』の天台宗寺院住持説にしたがえば、日春聖人は同族である日乘聖人が宗祖に帰伏したことがきっかけであるのに対し、『富士門家中見聞』によれば、日春聖人は日法聖人に教化されたことがきっかけとなつており、両者の記述は異なるように見える。日春聖人の宗祖門下帰属の前歴や経緯については不明の点も多いが、ここでは以上を確認しておきたい。<sup>(6)</sup>

## 二、日春聖人の俗姓鮎澤氏について

### (一) 日乘聖人について

この節より、日春聖人の出自とされる「鮎澤」についての検討をはじめよう。日春聖人の同族に日乘聖人がおられたことは先に見たが、同様の記述は『本化高祖年譜攷異』（安永八年（一七七九））にも見いだせる。

○日春 初名 空存 称 蓮明阿闍梨。乗公同族台密之英、住 岡宮徳榮山光長寺。聞 乗公改 宗、竟見 大士 受戒、還 告 大衆。

ここでも日春聖人は元天台宗（台密）の僧で空存と名乗り、日乘聖人と同族であること、同師の改宗が日春聖人の宗祖門下への帰順の契機であることが記されている。

では、この日乘聖人とはどのような人物なのか。『本化別頭佛祖統紀』には以下のような記述がある。

### ○甲州休息立正寺第二代日乘上人伝

師諱、日乗号、真妙院、俗姓者鮎澤氏、元、真言宗、呼、式部阿闍梨、有、智行兼美、之替、主、于山梨郡等力郷北原村金剛山胎藏寺也。

これによれば、日乘聖人は俗姓を鮎澤氏といい、山梨郡等力郷北原村（筆者注：現在の勝沼町休息）にある真言宗金剛山胎藏寺に住していたことがわかる。この胎藏寺は現在の休息山立正寺のことと考えられる。

この胎藏寺は、はじめ大宝二年（七〇二）に創立された後、聖武天皇の時代に行基が甲州を教化弘通し、地藏菩薩を本尊にして子安山地藏寺と名付けられた。その後延長三年（九二五）真言宗となり、更に長和四年（一〇一五）金剛山胎藏寺と改めた。その後永保三年（一〇八三）住職の覚範は真言修験を行い、関東三十三カ国の棟梁

として部内の取りしまりにあたり、子安千坊と称するように塔中が数千余、末寺数百を有し全盛を極めた。それから時を経た鎌倉時代、宗祖が鎌倉の草庵から甲州へ入り北原村で法華弘通を行った際、この寺で時の住持宥範と法論をたたかわせることになる。文永三年（一二六六）、宗祖四十五歳のことである。結果宥範は宗祖に教化され、支院末寺及び門徒を率いて法華に改宗した。さらに宗祖がこの地にて休息したことを以って当地の地名を日蓮休息村とし、それに伴い建治二年に山号を休息山とした。また立正安国論講談の地であるため寺を立正安国寺と改称したが、後年は略して立正寺という。開山は宗祖、第二祖開基は日法聖人である。宥範は真妙院日乗と名乗り、立正寺三世となった。<sup>(8)</sup>

(二) 鮎澤とはどこか

次に、日乗聖人と日春聖人に共通する俗姓「鮎澤氏」について検討しよう。「鮎澤」の発祥地は二つある。一つは駿河国駿河郡より起こる大森葛山流の「鮎澤」と、他の一つは甲斐国中巨摩郡より起こる清和源氏小宮山流の「鮎澤」である（※図①参照<sup>(9)</sup>）。

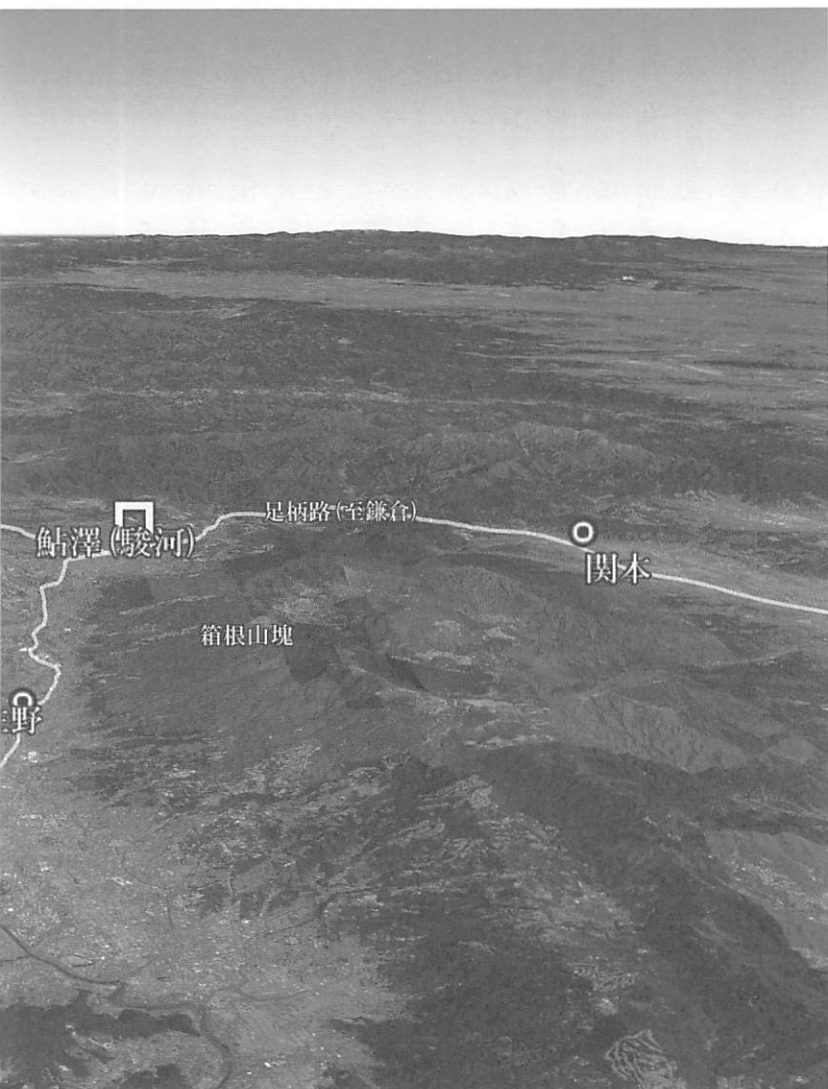
では一体甲州山梨郡に根を張った「鮎澤氏」はそのどちらとなるのか。単純に考えれば、山梨郡は同じ甲斐国に所属し距離も近いため後者である中巨摩郡の鮎澤氏に比定するのが自然のように思われる。そこで、日乗・日春両聖人と縁のある鮎澤氏が、駿河なのか甲斐なのかを検討するに際して興味深い資料が次である。

甲斐国柏尾山寺住僧申、鮎澤宿御雑事等事、所被免除也、可令存其旨之状、依仰下知如件、

嘉禎三年十二月六日

左京権大夫平御判（北条泰時）

修理権大夫平御判（北条時房）





図① (二つの鮎澤と鎌倉往還路)

地図データ : Google Earth,

Image, Landsat / Copernicus

Data SIO, NOAA, U. S. Navy, NGA, GEBCO

Data Japan Hydrographic Association

この史料は「関東下知状案」という。甲斐国柏尾山とは後に述べる大善寺のことで、嘉禎三年（一二三七）その住僧が鎌倉幕府に対して「鮎澤宿」の雑事の免除を願ひ出て、それが受け入れられたことを示している。雑事とは中世における年貢以外の種々の租税や労役のことで、「御雑事」とは宿泊や食事などの準備を行う課役のことである。松崎真吾氏の指摘によると、この「鮎澤宿」は甲斐国ではなく駿河国の鮎澤宿であるという。その根拠には二つあり、まず一つ目は歴史学者・湯山学氏の学説によるもので、この下知状案が発給された嘉禎三年十二月六日の日付によって駿河国の鮎澤宿と推定するものである。「吾妻鏡」によると、下知状案が発給された同年七月二十九日將軍藤原頼経による京への上洛が決定しており、翌年（曆仁元年）正月二十八日に鎌倉を出発している。その頼経一行は、相模国酒匂駅を経由して翌二十九日に藍澤駅（筆者注：鮎澤宿のこと）で一泊、次の日には車返（沼津）の牧御所に到着している。同年十月十三日に鎌倉下向のため京都を出発した頼経一行は、二十六日車返にて一泊、次の日鮎澤（竹下）宿で泊り、ついで酒匂駅の浜部御所で一泊した。湯山氏はこのような当時の状況をふまえて「この下知状案は、頼経一行が往復に宿泊した駿河国鮎澤宿の雑事と考える方が自然である」と述べている。つまりこの下知状案は嘉禎三年から四年にかけて將軍頼経の京都上洛・鎌倉下向の際の鮎澤宿雑事が甲斐国の大善寺に課せられ、この課役の免除を幕府に訴えて受け入れたことを下知するものにとらえられる。そしてこの鮎澤宿は酒匂駅と車返との間という位置関係を考慮すると、駿河国の鮎澤と考えるべきであるという。

二つ目は、建長四年（一二五二）三月、幕府の六代將軍に決定した宗尊親王が鎌倉に迎えられたとき、その道中で宿泊・休憩する際に雑事を行う担当者を定めた史料である。

御下向の御すくくならひにひるの御まうけの所

(中略)

は、なか あの きせかわ

さの さの、ちとう

あゆさわ かいのくに

やまなか せきもと かの、しんさえもん

お、いそ みうらのすけ

この史料を見ると、「あゆさわ(鮎澤)」の担当は「かいのくに(甲斐国)」と記されている。この「あゆさわ」は、裾野市の「さの(佐野)」と、足柄峠の「やまなか(山中)」ならびに「せきもと(関本)」との間に位置する宿という関係から、駿河国の鮎澤宿であることは間違いない。つまりここでも鮎澤宿の雑事が甲斐国に課せられていることがわかる。よって「関東下知状案」に記される「鮎澤宿」は駿河国の鮎澤宿であり、当時鮎澤宿の雑事は恒常的に甲斐国に課せられていたと考えられる。

では今回雑事を免れた大善寺はどのような寺院であったのだろうか。大善寺は養老二年(七一八)に行基が草創し、四十五代聖武天皇の時代より朝廷の祈願所となった由緒をもつ寺院である。後に弘法大師を開山として真言宗に転宗し現在に至っている。元暦年中(一一八四)には鎌倉幕府(執権大江広元)の祈願所、建久三年(一一九二)には頼朝の命により將軍家代々の祈願所となり、様々な保護が与えられた<sup>(18)</sup>という。このことは山梨郡にある大善寺が当時より鎌倉幕府と密接な関係があったことを示している。今回の雑事の例をとっても、その接待は將軍一人ではすまないためにたくさんの食料や馬の飼料が必要となる。それらを選ぶ人足が甲斐国で徴発され、多くの人々が運送や食事のしたくなどに動員されたことであろう。その費用は甲斐国内から調達され、地頭や寺

社に対して所領の大きさに応じて割り当てられていたといふ<sup>(19)</sup>。そのため駿河国鮎澤と山梨郡は、当時より物資や人々の往来が多かったと言えるのではないだろうか。

鎌倉から山梨郡へ至る交通の要衝に駿河国鮎澤があり、甲斐国への入口につながっている。甲斐国にとつては地理的に重要な場所であり、その結果人々の往来を見ても甲斐国鮎澤より駿河国鮎澤の方が多かったと推察される。そして大善寺は日春聖人が住した金剛山胎藏寺（のちの休息山立正寺）と同じ山梨郡に存在し、一里にも満たないほど近い距離にある。以上のことを鑑みるに、日春聖人の出自が駿河国発祥の鮎澤氏である可能性は高く、日春聖人が後に駿河で活躍されたことを考慮すると、私には日春聖人は駿河国に縁故のある鮎澤氏に連なると考えるほうが自然に思える。対する甲斐国の鮎澤氏については、現在までに遺された史料は乏しく不明な点が多い。そこで以下では、ひとつの仮説として日春聖人を駿河国の鮎澤氏に連なる者と考え、その活躍の背景について探ってみたい。

### (三) 鮎澤氏の系譜

ではここからは駿河国鮎澤氏の系譜を追っていききたい。鮎澤の姓を名乗るに至るまでの経緯を記した史料は系図類である。鮎澤氏が登場する系図は複数存在するが、「大森葛山系図」(※図②参照)では藤原惟兼が最初に鮎澤姓(鮎澤四郎)を名乗った人物であるとしている。この鮎澤氏は藤原北家道隆流(中関白家)より分流したとし、藤原氏の祖大織冠鎌足から始まり、不比等、房前、真楯、内麿、冬嗣、良房、基経、忠平、師輔、兼家、道隆、伊周と続く関白や摂政などを代々つとめた家系である。

惟兼の父である惟康は甲斐・駿河両国の国司となったが、その子の代になって三家に分かれた。そのうち親康は大森氏や大沼氏の祖となった。そして注目したいのが惟兼(鮎澤四郎)であり、後に駿河郡において強大な勢

力を持つ豪族の「葛山氏」の始祖になった人物である。

しかし、系図というのはその性質上、家系や先祖を飾り立てるために作為が施されることが多く、真偽を確かめる必要がある。そのためまずは鮎澤氏ならびに葛山氏に関して言及のある複数の系図類を抽出した。それぞれ、系図の名称・(所蔵並びに所収)・家流・惟兼の説明の順で記載している。

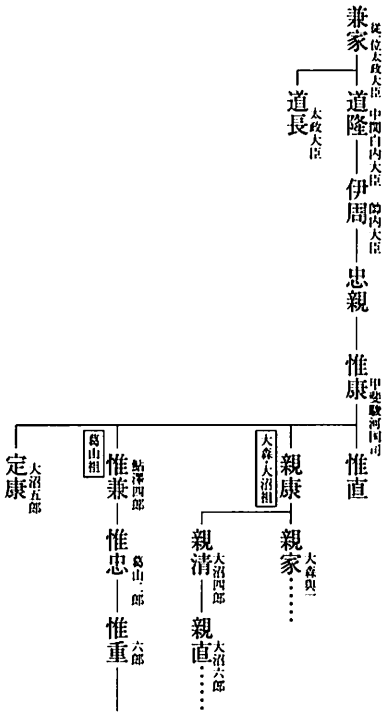
・大森葛山系図(統群書類従)所収) 藤原北家流 惟兼を「鮎澤四郎大夫又藍澤」と記す

・姉小路系図(系図綜覧)所収) 藤原北家流 惟兼を「鮎澤四郎大夫又藍澤」と記す

・大森系図(生土乗光寺所蔵) 藤原北家流 惟兼を「四郎大夫」と記す

・葛山家譜(甲斐叢書)所収) 藤原北家流 維(惟)兼の父維(惟)康を大森葛山の祖と記す

図② (大森葛山系図―抜粋) <sup>(20)</sup>



・葛山御宿系図(藤曲孝明氏所蔵) 藤原北家流 維(惟)兼を「葛山次郎大夫」と記す

・武田源氏一流系図(甲斐叢書)所収) 藤原北家流 惟(維)兼を「葛山次郎大夫」と記す

と記す

・仙年寺過去帳(裾野市仙年寺所蔵) 惟(維)兼を葛山元祖と記す

・竹之下藍沢系図(竹之下興雲寺・湯山孝氏所蔵) 天智天皇系 惟兼の名は見えない

以上の通り、鮎澤を号したとする系図は

「大森葛山系図」「姉小路系図」の二つのみとなっている。竹之下藍沢系図以外は藤原北家流であり、惟兼あるいは父の惟康が葛山氏の祖という点も共通している。しかしこれら系図の比較からは鮎澤氏の存在の是非についてはなかなか判定しづらい。そこで次に古文書等を参照し、「大森葛山系図」「姉小路系図」とおり鮎澤氏が実在したかの真偽を考察していく。

まず「姓氏家系大辞典」によれば鮎澤氏は、「駿河国駿河郡（駿東郡）鮎澤より起る、この地、東鑑に藍澤に作る、また合澤ともあり。よりて氏号も藍澤とも合澤とも記す。」<sup>(21)</sup>とあり、藍澤・合澤とも名乗ったことがわかる。次に歴史書を見てみると「吾妻鏡」には、文治元年（一一八五）の十月になって頼朝の意向に逆らう行動の多かった弟の源義経を京都堀河に追討すべく出発した討手の一人に「藍澤二郎」の名が見える。<sup>(22)</sup>「御殿場市史」では「情勢の推移に応じて、この一族は新しい武家政権の首長に臣従していったのである。（中略）義経追討に向かった藍澤二郎とは、「大森葛山系図」の葛山二郎惟忠、「尊卑分脈」の二郎惟忠と考えてよさそうである。」<sup>(23)</sup>と述べている。

その「吾妻鏡」では、惟兼の孫である藤原惟重（六郎）について、次のように記す。

（建久四年五月）二日丁卯。北條殿下<sub>二</sub>向駿河國<sub>一</sub>給。是爲<sub>レ</sub>覽<sub>二</sub>狩倉<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>赴<sub>二</sub>彼國<sub>一</sub>給。御旅館已<sub>レ</sub>下事。仰<sub>二</sub>伊豆駿河兩州御家人等<sub>一</sub>。狩野介相共可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>給<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>。合御旨。先以首途給<sub>二</sub>。<sup>(24)</sup>

ここには頼朝に命じられた北条時政が巻狩の獲物の状態を見るため駿河国へ先に出発し、宿泊する旅の館などのことを伊豆と駿河の両国の御家人達に命じたことが記されているのだが、「大森葛山系図」にて惟重を参照すると、注記に次のように見える。

六郎 御宿殿。建久四年五月八日頼朝富士藍澤御狩時御宿申。則号御宿。三位中将重衡理髮ノ子。初号竹下

孫八郎。法名從佛。<sup>25)</sup>

これによると惟重は建久四年五月八日に源頼朝が藍澤の地において富士の巻狩り<sup>26)</sup>を行った際に宿を手配し、それがきっかけでこの地を御宿<sup>みしく</sup>と号したとある。つまり、北条時政が御家人に命じたとする一人がこの惟重ということになる。

以上、惟兼の子惟忠と孫の惟重が世に存在し、かつ子の惟忠は「藍澤(鮎澤)」を名乗っていたことがわかる。そして孫の惟重は鮎澤の地を本拠にしていたこともほぼ間違いない。そのことから惟兼の代で鮎澤を名乗った可能性は十分に高く、この大森葛山系図はある程度の信憑性をもってみる事が出来る。

以上のことから、日春聖人・日乘聖人の先祖鮎澤氏は、惟兼の流れを汲み、当時の鎌倉往還である甲州路によつて結ばれた山梨郡を勢力圏に加えていったのではないかと推察する。現在山梨県下に住む大森氏は、駿河鮎澤一族の大森氏が発祥であるといわれている<sup>27)</sup>。また、山梨郡の芦沢氏は、同じく駿河の大森氏流であるという<sup>28)</sup>。このことは当時鮎澤一族が山梨郡を管轄下に置いたことの証ではなからうか。惟康が甲斐・駿河両国の国司であつたことも、甲斐国への入国を容易にした可能性もあり、今後研究の余地がある。

#### (四) 大森・大沼・葛山氏の繁栄

では、次に鮎澤氏と同族である大森・大沼・葛山一族が根を張つた地域はどのようなところであつたのか。鮎澤といわれる地域は、大沼鮎澤とよばれ大沼という沼から流れでる川が鮎澤という沢をなす湿地帯であつたという(※大沼の位置には諸説あり―後述―)。この地域は十二世紀の前半期には伊勢神宮の荘園・神領であつたため大沼鮎澤御厨と呼ばれる。建久三年(一一九二)八月の伊勢大神宮領注文写(神宮雜書)に「大沼鮎澤御厨給主神祇権少副親広 已上件神領等、子細于嘉承・永久宣旨也」とみえ、「ヲ、ヌ アユサワ」の訓を付して

いる。<sup>(29)</sup>『小山町史』によれば、「開発領主に関しては大森・葛山氏の先祖と推定され、藤原系の合澤（鮎澤）氏と考えられる」としている。<sup>(30)</sup>この地の給主（神宮より御厨の支配・管理をまかされた者で、上分物を神宮に納める責任を持つ）は大中臣親広（生没年不明）といい、この大中臣氏の先祖と大森・葛山氏の先祖はつながりがあるという。<sup>(31)</sup>同じく『小山町史』では、「その縁から大沼鮎澤の地域が伊勢神宮に寄進されることになった可能性は高い」とする。<sup>(32)</sup>神宮の祭主の大中臣輔親の女が内大臣藤原伊周との間に忠親という子を生み、その忠親の子の惟康が甲斐国や駿河国の国司となった。（※図③参照）『御殿場市史』では、「親康は別の資料で久安二年（一一四六）に信濃権守に任命されている事実がわかり、十二世紀前半の人であったと推定され、大体この忠親から惟康の間に駿河国に本拠を移し（中略）さらに支配を拡大して大沼鮎澤御厨を開発したのであろう。（中略）ともかく十一世紀後半には、この御厨を掌握していたことは確かである」としている。<sup>(33)</sup>

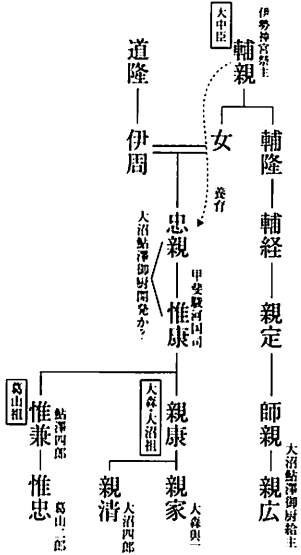
その後一族は分かれ勢力を伸ばしていく。惟康の子親康より発する大森氏は現在の裾野市を發祥の地とし、東の箱根や北の足柄方面に勢力を伸ばした。尚、大森（オオモリ）は齋藤泰造氏によると箱根山塊の別称であったのではないかと推測している。<sup>(34)</sup>

同じく惟康の子惟兼より発する葛山氏は現在の名字の地である裾野市葛山から西方や南方に向かって勢力を広げた。齋藤氏によると、葛山（カツラヤマ）はフジ山を指し、その富士山を背にした地域のためにそう呼んだのではないかとしている。<sup>(35)</sup>

次に大森氏と同じ親康より発する大沼氏の發祥であるが、残された史料が乏しく不明な点が多い。しかし限られた情報より推測を行えば次の通りである。大森葛山系図には、親康の子親清（大沼四郎）の注記に「河合殿（中略）大原村領主」とある。齋藤氏によれば「大原は浮島ヶ原、河合は黄瀬川と狩野川の合流点付近から香貫

地区や河口周辺を示すものと思われる<sup>(37)</sup>といひ、駿河湾方面の南方に下つて現在の沼津市まで勢力を広げたと考えられる。その理由として、現在の鮎澤付近には地名の特徴といえるまでの大きな沼が存在しないことを挙げている。大沼鮎澤地域の範圍は研究者の間で諸説あるが、現在は御殿場を中心とした山間の地域が有力とされている。しかし斎藤氏の見解はそれとは異なり、さらに南方へ広大な範圍に及んでいたとするものである。筆者はこの斎藤氏の説は大いに注目すべきものであると考えており、その理由としてまず「沼津」の地名にもあるとおり大きな沼地は河口、湾岸エリアに集中していることが挙げられる。また、沼津市南部にある大平地区(旧駿東郡大平村)は、かつて「鮎澤莊」<sup>(38)</sup>に属していたことが「莊園志料」にてわかる<sup>(39)</sup>。そのことから大沼鮎澤の範圍は現沼津市南部までに及んでおり、この「大沼」は河口・湾岸エリアを指すものという可能性を指摘したい。また「沼津市史」には、「藍沢は長泉町下土狩の藍壺(鮎壺)の流とも関連して、黄瀬川を指すもの」<sup>(40)</sup>とあり、古来黄瀬川を鮎澤と呼んだ可能性に言及している点からもこの説に信憑性があると考へる。

図③ (大中臣氏と大森・葛山・大沼氏)

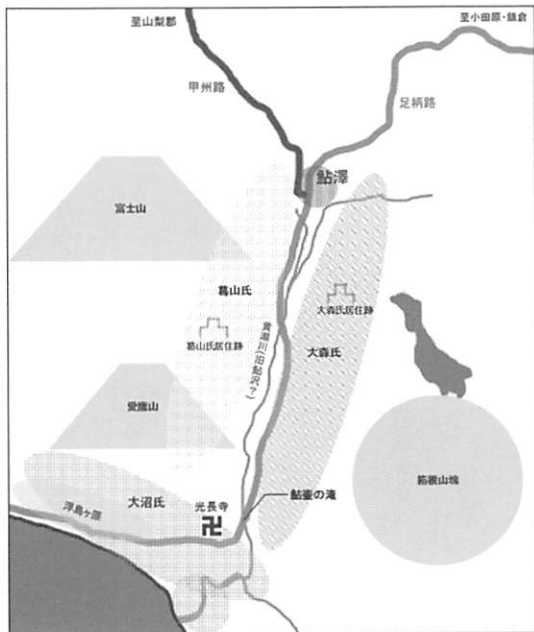


以上の勢力構成を図解すると(※図④参照)黄瀬川をはさんで東側に大森氏、西側に葛山氏、南側に大沼氏という構図となる(※勢力範圍は筆者の想定)。

(五) 鮎澤一族の繁栄と日春聖人

日春聖人(空存)は甲斐国山梨郡出身で俗姓は鮎澤といた。本節第二項で述べてきたように、聖人の俗姓鮎澤氏が駿河郡を本拠とする鮎澤氏であると考えると、その一族は大森・大沼・葛山氏に連なることになる。この一族の

図④ (大森・葛山・大沼氏勢力図―十二世紀中期(後半)を想定―)



勢力が足柄路と甲州路の分岐する駿河国鮎澤の地から南方へ及んでいく(大森氏は相模国方面を含む)のにあわせて、日春聖人も沼津の地へ移り、一族の外護をより強く受けて岡宮の地で活躍されたのではないだろうか。

#### おわりに

以上、日春聖人の出自と経歴について従来の説を整理し私見を述べてきた。日春聖人の出自と経歴については、直接的な資料の乏しさから不明なところが多いのであるが、本稿では聖人の出自が鮎澤氏であることに着目し、それが駿河国鮎澤に

関係するものとの仮説の上に、師の伝記について多少なりとも新たな情報を提示できたのではないかと考える。今後はこの仮説を検証し、さらに聖人の実像を解明するための調査をすすめていきたい。

#### 注

(一) 太田晴道「日春・日法両聖人の出会い」(二)「『無上道』第四八八号、平成元年八月」三二―三三頁。

- (2) その他の史料として、「光長寺過去帳」(光長寺寺寶集編纂委員会編「光長寺寺寶集」光長寺、平成二十七年四月、一七〇頁)と、後述する「本化高祖年譜攷異」(日諦・日著「本化高祖年譜攷異會本」(日蓮宗全書出版会「日蓮宗全書」須原屋書店、明治四十三年六月)一四九頁)が挙げられ、どちらも天台宗の住持で「空存」と名乗ったことが書かれる点で同様である。
- (3) 「本化別頭佛祖統紀」本満寺、昭和四十八年十月、二七五―二七七頁。
- (4) 太田師によると「当要集」(香川国祐寺蔵)や「岡宮光長寺記録」(京都本能寺蔵)にも同じ記述があり、富士派・八品派共通の所伝であったとする。
- (5) 「富士門家中見門 下」(堀日亨編「富士宗学要集 第五卷」富士宗学要集刊行会、昭和三十一年八月)二四四頁。
- (6) 太田師は前掲稿のなかで、空存が天台寺院住持であったとする説に比べて六十六部の聖説はあまりに物語のすぎるくらいがあること、また六十六部納経巡礼は室町時代初期から始まったとする通説があることを踏まえ、寺院住持説の方が史実に近いのではとお考えのようである。
- (7) 前掲「本化高祖年譜攷異會本」一四九頁。
- (8) 勝沼町誌刊行委員会編「勝沼町誌」勝沼町役場、昭和二十七年五月、一二三五―一二三六頁。
- (9) 太田亮「姓名家系大辞典」角川書店、昭和三十八年十一月、二三〇頁。
- (10) 「関東下知状案」(「大善寺文書」小山町史編さん専門委員会編「小山町史」小山町、平成八年三月、史料番号三九八号)
- (11) 松村明監修「デジタル大辞泉」小学館、平成三十年十二月。
- (12) 松崎真吾「鎌倉時代の駿東郡―藍沢駅、藍沢原を題材に―」(「裾野市史研究」第五号、平成五年三月)七一―七四頁。
- (13) 黒板勝美編「新訂増補国史大系三十三卷 吾妻鏡後編」国史大系刊行会、昭和七年、二〇〇頁には次のようにある。

進明阿闍梨日春聖人伝についての一考察(武市秀学)

(嘉禎三年七月) 廿九日戊寅。晴。明年御上洛事。被<sub>レ</sub>經御沙汰。今日京都使者參着。去十七日。鷹司院御入内。是御准母之儀也<sub>云々</sub>。

(14) 前掲「新訂増補国史大系三十三卷 吾妻鏡後編」二〇八頁には次のようにある。

(曆仁元年正月) 廿八日乙亥。天霽。將軍家御上洛。(中略) 酉刻着<sub>一</sub>御酒匂驛。(中略) ○廿九日丙子。今夕。入<sub>一</sub>御藍澤驛。○二月大〇一日丁丑。天晴風烈。申一點着<sub>一</sub>御車返牧御所。

(15) 前掲「新訂増補国史大系三十三卷 吾妻鏡後編」一三〇〜一三一頁には次のようにある。

(曆仁元年十月) 十三日〇甲寅。天霽。寅一點。將軍家關東御下向御進發也。(中略) ○廿六日丁卯。晴。未剋車返御宿。○廿七日戊辰。霽。鮎澤竹下御宿。○廿八日己巳。晴。酒匂驛。濱部御所。

(16) 湯山学「相模国の中世史 上」、昭和六十三年七月、一〇一頁。

(17) 「宗尊親王鎌倉御下向記」(静岡県史 資料編5 中世一)、平成元年、史料番号一〇〇三号)

(18) 前掲「勝沼町誌」一二四四〜一二四五頁。

(19) 前掲「小山町史」三八六頁〜三八七頁。

(20) 「尊卑分脈」(稿保己一編「統群書類従」第六輯下系図部、統群書類従完成会、昭和三年一月) 一九〜二八頁。

(21) 太田亮「姓氏家系大辞典 第一卷」角川書店、昭和三十八年十一月、二三〇頁。

(22) 黒板勝美編「新訂増補国史大系三十二卷 吾妻鏡前編」国史大系刊行会、昭和七年、一七二頁には次のようにある。

(文治元年十月) 九日戊午。可<sub>レ</sub>誅伊豫守義經之事。日來被<sub>レ</sub>疑群議。而今被<sub>レ</sub>遣土佐房昌俊。此追討事。人々多以有<sub>レ</sub>辞退氣之處。昌俊進<sub>レ</sub>而申領狀之間。殊蒙御感仰。已及進發之期。參御前。老母并嬰兒等在下野國。可<sub>レ</sub>令加憐愍御<sub>レ</sub>之由申<sub>レ</sub>之。二品殊被<sub>レ</sub>諾仰。仍賜下野國中泉庄<sub>云々</sub>。昌俊相具八十三騎軍勢。三上弥六家季。(昌俊弟) 錦織三郎。門真太郎。藍澤二郎以下<sub>云々</sub>。行程可<sub>レ</sub>爲九ヶ日之由被<sub>レ</sub>定<sub>云々</sub>。

(23) 御殿場市史編さん委員会編「御殿場市史 通史編上」御殿場市役所、昭和五十六年六月、二八〜二九頁。

(24) 前掲「新訂増補国史大系三十二卷 吾妻鏡前編」四八九頁。

(25) 前掲「尊卑分脈」二五頁。

(26) 前掲「新訂増補国史大系三十二卷 吾妻鏡前編」四八八頁には次のようにある。

(建久四年五月) 八日癸酉。將軍家爲<sub>レ</sub>覽富士野藍澤夏狩。令<sub>レ</sub>赴駿河國給。江間殿。上総介。伊豆守。小  
山左衛門尉。同五郎。同七郎。里見冠者。佐貫四郎大夫。畠山二郎。三浦介。同平六兵衛尉。千葉太郎。三  
浦十郎左衛門尉。下河邊庄司。稻毛三郎。和田左衛門尉。榛谷四郎。淺沼二郎。工藤左衛門尉。土屋兵衛尉。  
梶原平三。同源太左衛門尉。同平二。同三郎兵衛尉。同刑部丞。同兵衛尉。糟谷藤太兵衛尉。岡部三郎。土  
岐三郎。穴戸四郎。波多野五郎。河村三郎。加藤太。同藤次。愛甲三郎。海野小太郎。藤澤二郎。望月三郎。  
小野寺太郎。市河別當。沼田太郎。工藤庄司。同小次郎。祢津二郎。中野小太郎。佐々木三郎。同五郎。澁  
谷庄司。小笠原次郎。武田五郎等候御共。其外爲<sub>レ</sub>射手輩之群參不<sub>レ</sub>可勝計云。

(27) 山寺和夫「山梨姓氏録」、昭和六十二年十二月、八一頁。

(28) 前掲「山梨姓氏録」二十二頁。

(29) 静岡県地名編集委員会編「日本歴史地名体系第二二巻 静岡県の地名」平凡社、平成十二年十月、二八七〜二  
八八頁。

(30) 前掲「小山町史 第六卷」三三〇頁。

(31) 大森葛山系図によると、大森・葛山氏の先祖にあたる忠親の注記に次のように見える。

伊周公一男、道雅三位兄也、母祭主輔親三位女、上東門院女房、伊勢大夫、仍外祖父輔親令養育之、  
つまり、忠親の母は大中臣輔親の娘で、その縁により忠親は輔親に養われたという。

(32) 前掲「小山町史 第六卷」三三二頁。

(33) 前掲「御殿場市史 8 通史編上」二四〜二五頁。

逆明阿闍梨日春聖人伝についての一考察(武市秀学)

(34) 榊林一美「葛山氏の出自と伊勢神宮」(『小山町の歴史』第七号、平成五年、二六頁)によると、この御厨については岡田米夫氏や福田以久生氏の研究により実体が解明されつつあるといい、どちらも開発者を大森氏や葛山氏の先祖と想定しているという。

(35) 齋藤泰造編著「忘れられていく 古代東海道足柄路・甲斐路抄調査書―地名・古い図・地形などから探る―」(ミヨウソジン三百五十年祭記念誌)(私家版)、平成十一年十月、一六三―一六五頁。

(36) 齋藤前掲書、一六三―一六五頁。

(37) 齋藤前掲書、一六三―一六五頁。

(38) 清水正健編「莊園志料(下巻)」、平成八年十月、一四〇〇―一四〇一頁に、大沼鮎澤御厨は別名として「藍澤御厨」・「鮎澤莊」とも称することが記されている。

(39) 前掲「莊園志料(下巻)」一四〇一頁には、大沼鮎澤御厨の中に駿東郡大平村(現沼津市大平)が含まれることが記載されている。また、大平にある鴛頭神社(文明元年(一四六九)創建)に納められる文化五年(一八〇八)と文政四年(一八二二)に記された棟札には「駿州駿東郡鮎澤庄大平邑」という記載があり、このことから大平は大沼鮎澤の範囲であったことがわかる。(鴛頭神社ホームページ参照：<http://www.inarijinja.com/kenmu/washizu/index.htm>) [最終閲覧日二〇一九年一月八日]

(40) 前掲「沼津市史 上巻」一三三頁。

(41) 前掲「小山町史 第六巻」三三三頁の「大中臣系図」と、前掲「尊卑分脈」一九―二八頁を参照・引用して作成。

#### 〈附記〉

尚、本研究ノートを作成執筆するにあたり、太田晴道師ならびに石田智宏師には親身にご指導いただいた。また、本研究ノートの基礎となった平成二十六年年度興隆学林専門学校の卒業論文を作成した際には、副査の井原木憲紹先生に大

褒お世話になった。この場をお借りして深く感謝申し上げる次第である。

〈キーワード〉日春聖人 光長寺 鮎澤

逆明阿闍梨日春聖人伝についての一考察（武市秀学）